

平安京への山陽道新設の意義

戸原和人

1. はじめに

長岡京と平安京の山陽道については、『長岡京古文化論叢Ⅱ』1992年刊行^(注1)で一度検討をおこなっている。その後も、数地点において調査がおこなわれており、周辺での関連すると考えられる調査結果も整理・検討されてきている。長岡京・平安京の官道については、駅や津の検討も含めた高橋美久二のすぐれた研究成果があり、交通体系に関する総合的な評価については結論が出された感がある^(注2)。

「古代都城の造営に当たっては、物資の搬入や地方との交通確保のため、計画段階から上記の官道の取付けも計画されたはずである。」このことは、「延暦2年(783)6月17日に摂津国西成郡江北にあった東大寺の寺家荘を駅家とし、長岡京と難波京を結ぶ陸のルートを作り、延暦三年(784)七月四日条には南海道の国々(阿波・讃岐・伊予三国)に命じて山崎橋を修理させている」ことからよくわかる。そして、「二つの旧都への道や山陽・南海両道の主駅としてだけでなく、水陸の交通路の結接点として山崎駅がおかれた。」この山崎駅以东については、宮都造営のための物資搬入のルートとして山崎橋から長岡京までの道路が新設されたのかそれ以前から在った道路を利用したのかについては現在もよくわからない^(注3)。

長岡京の所在する京都西南部の旧乙訓郡には、西国から延長される二本の幹線と考えられる道が残っている。南端の大山崎町から発し、長岡京市を経て京都市へと一直線に伸びる「久我畷」と、大山崎町から長岡京市を経て向日市から京都市にはいる「西国街道」である。

西国街道では、大山崎町内の右京域の調査によって9世紀の、想定路面幅10mの道路が確認されている。前稿でこの路線は当初、久我畷のルートをとった山陽道が小畑川水系の氾濫により度々寸断されることにより9世紀の後半からは、山陽道としての機能を持ったのではないかと考えた。

久我畷は、左京第53次調査によって平安京遷都直後に築造された路面幅8.8~8.9mの山陽道であることがあきらかとなっている。

以下では前回検討した調査成果を簡単にまとめ、この山陽道の築造された地形的条件や路線決定の意義について考えてみたい。

2. 山陽道の発掘

(1) 西国街道での調査(第1図)

大山崎町内で7地点、向日市内で1地点の調査がおこなわれている。西国街道の調査地の立地は総じて低位段丘上面の様相を呈している。

①山城国府第1次調査

平安時代前期から中期にかけての遺物包含層と、平安中期の包含層に覆われた東西方向の細長い建物の基壇、それに沿った東西方向の道路状遺構を検出した。この遺構は、平安時代前期から各時代の土器を含む層が版築状にタタキ占められていた。路面は、現在の西国街道の下に続いており、古代の山陽道の路面と考えられる^(注5)。

②右京第59・69次調査・大山崎町遺跡確認第15次調査

これらの調査では、現西国街道の両側で側溝を確認した。長岡京跡右京第69次・第159次調査では、西側溝を、遺跡確認第15次調査では、東側溝を検出した。

両溝との東西外側での肩部の距離は約15mを測る。側溝肩部の検出高から両溝の内法を想定し、路面の盛土を考えれば、想定される路面幅は約10m程度となる。所属時期は概ね9世紀と考えられる^(注6)。

③長岡京跡右京第349次調査

東西側溝を検出している。東側溝と西側溝の関係については、最終的な結論が出されていないが、おおむね前記の状況に依っている。

埋没年代は、いずれも9世紀中頃から10世紀前半に比定されている^(注7)。

④長岡宮跡第233次調査

向日市内での調査で、西国街道の西側で並行する側溝を確認している。溝内からは、緑釉陶器土師器の小片がわずかに出土しており、おおむね平安時代前半期と考えられている^(注8)。

(2) 久我畷の調査(第1図)

久我畷の調査は長岡京市内で2地点大山崎町内で4地点で行なわれている。久我畷の調査地の立地は総じて沖積平野に形成された緩扇状地の先端部の様相を呈している。

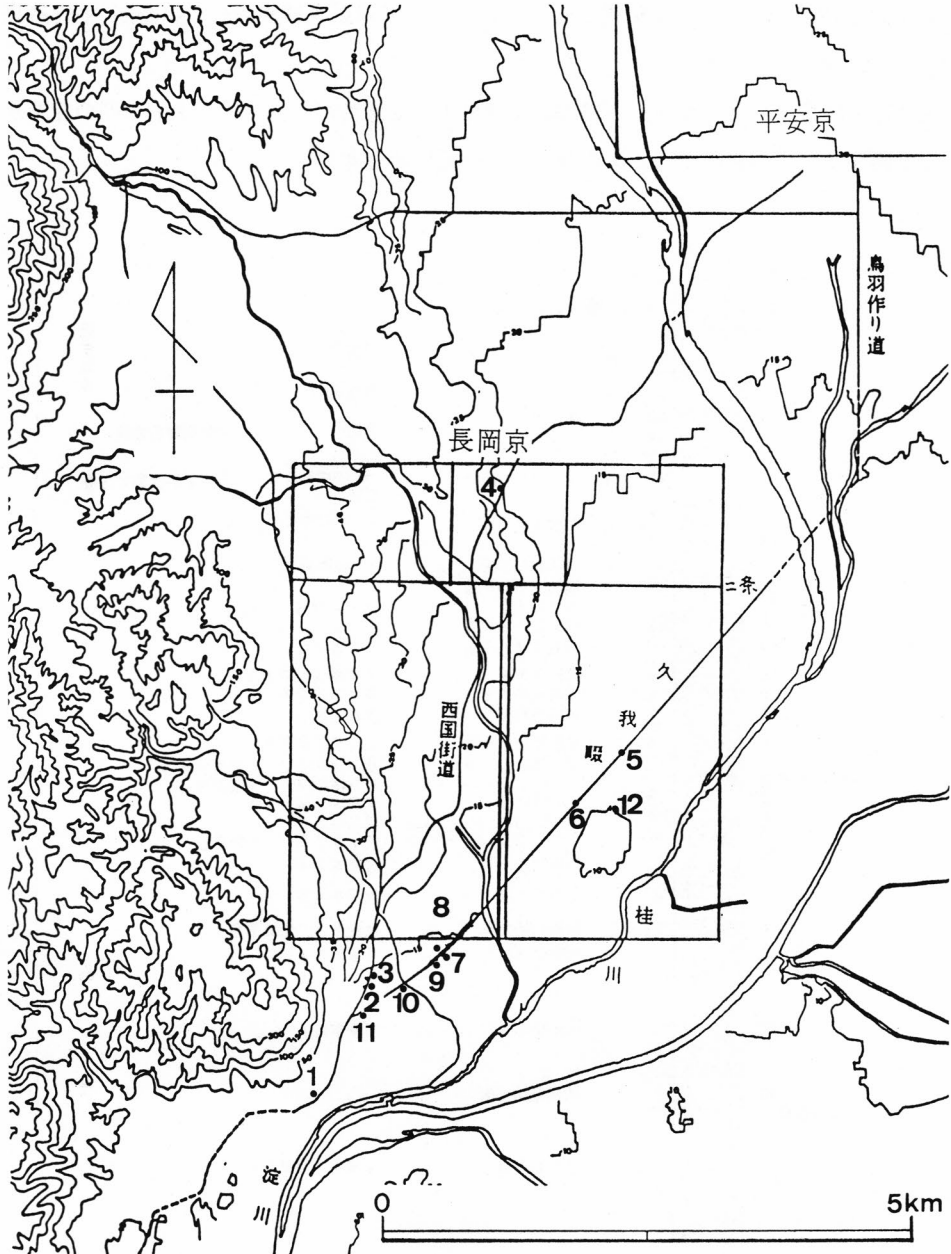
⑤長岡京跡左京第28次調査

長岡京市の東端の水田地帯で久我畷の西側に並行する側溝を検出した。出土遺物から後述の左京第53次調査久我畷の第3期に並行する13世紀末～14世紀初頭と考

えられる。調査地付近では小畑川水系による平安時代の洪水堆積が認められる。^(注9)

⑥長岡京跡左京第53次調査(第2図)

調査地の標高は10.84mで、10m付近で中世遺物を包含する細砂層及び暗灰色粘土層が堆積する。長岡京期の遺構検出面は、標高9.5mで、その上には長岡京期の遺物を包含する暗灰色粘土層が堆積している。長岡京期の遺構面以下では、標高9mあたりまで厚さ10

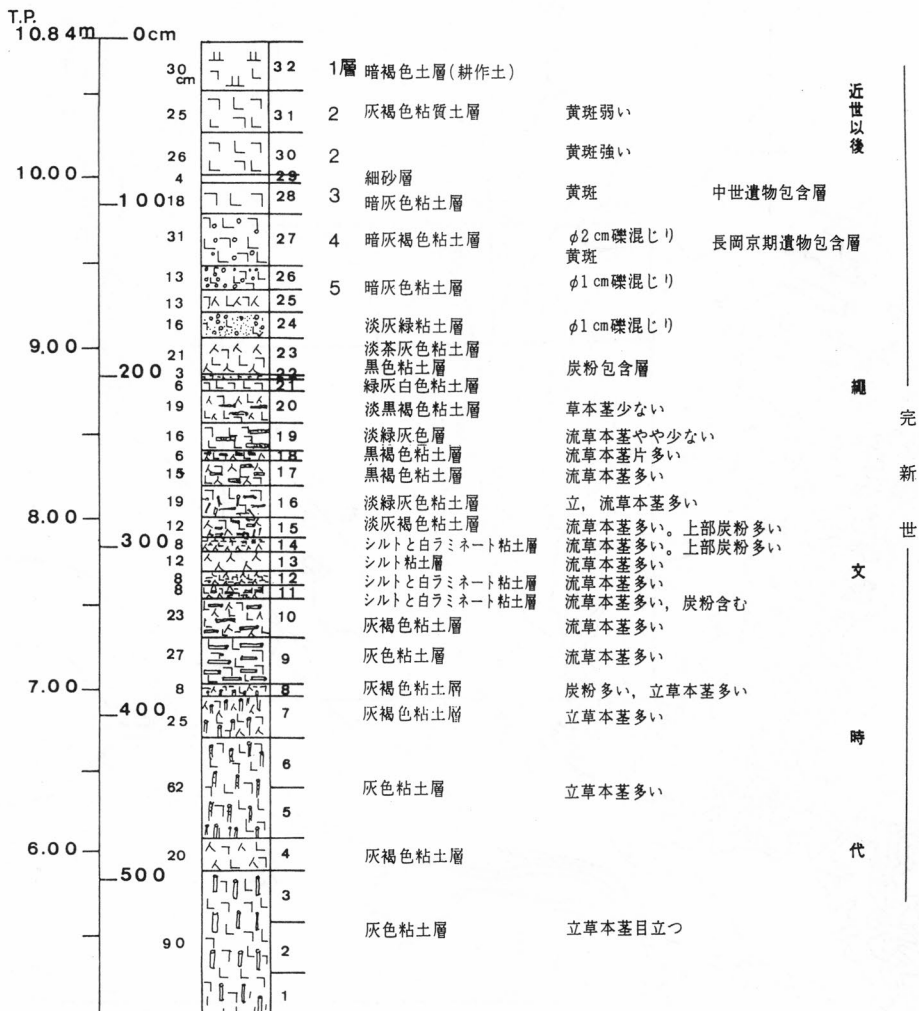


第1図 山陽道の調査地点(注1による。一部加筆)

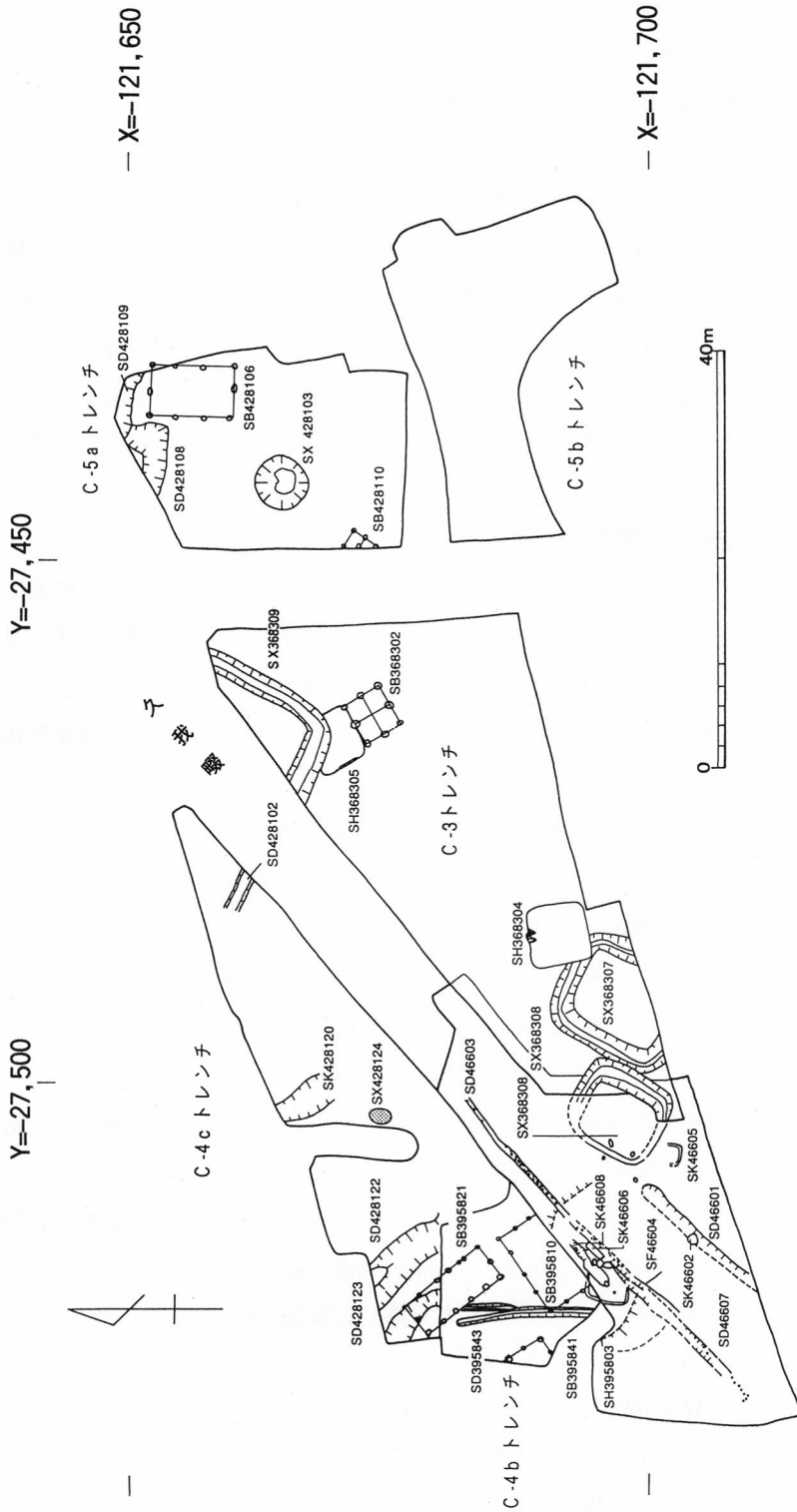
数cmの礫を含む粘土層の堆積が認められ、それ以下標高7m付近までは、流草本茎の多い堆積状況を示し5mまでは立草本茎が多い湿地状の堆積といえる。調査は、久我畷を断ち割り、現在の路面も含めて4期にわたる路面および側溝を確認した。

第1期 地表下約1.2mで検出。溝S D5320と溝SD5315によって画される、粘土とバラスからなる路面で、路面幅8.8~8.9mを測る。断面の観察により内側に改修が行われたことが確認されている。長岡京遺構面との関係により長岡京廃都後間もない時期(平安造京時)と考えられる。

第2期 溝S D5318と溝S D5315の改修溝によって画される、砂・シルト・礫の互層からなる路面で、路面幅4.6~5.5mを測る。12世紀以前と考えられる。



第2図 長岡京跡左京第53次調査地点土層柱状図(注10による)



第3図 長岡京跡右京第368・395・428・446次調査平面図(注11・12により合成)

第3期 溝S D 5306と砂質土と粘土の互層による路面からなる。残存基底部幅4.24mの路面を検出、時期は13世紀末～14世紀初と考えられる^(注10)。

⑦・⑧長岡京跡右京第368・395・428次調査(第3図)

調査地は、久我畷を挟んだ両側で、地形的には、洪積下位段丘の先端にあたる。この段丘には、南北に北から恵解山古墳、南栗ヶ塚古墳、境野古墳群が並び築造されている。調査では、新たに3基の方墳や、古墳時代の堅穴住居・掘立柱建物を検出している。検出した古墳は、いずれも後世の削平により墳丘を失っているが、そのうちの古墳S X 368309は、久我畷の下に潜り込んでおり、長岡京の造営が当地に及んでいない現状では、山陽道築造時に破壊された可能性がある。この古墳の周濠は、久我畷の西側の溝S D 428102に断面形や埋土が似ており、一連の遺構の可能性が考えられるためこの地点で検出した古墳のうちで最も大きく一辺20m以上の方墳である^(注11)。

⑨長岡京跡右京第446次調査(第3図)

現在の久我畷(標高11.9m)の下層30～80cmで二条の溝と一条の土壙状遺構を検出した。

久我畷西側溝S D 44603 現道の直下で検出した幅約0.5m、深さ3～10cmの浅い溝であり、一部では路肩保護のための松杭と板材が路面側に施されている。

久我畷路面S F 44604 溝S D 44601と溝S D 44607の並行する溝によって区画される路面。S D 44601と溝S D 44607の内側の肩部で路面幅約6mを測る。この路面幅は、左京第53次調査で検出した第2期(12世紀以前)の路面幅4.6～5.5mに近いものである。路面は、砂礫と黄褐色の粘土で舗装されており、窪地には、布目瓦が投げ込まれていた。調査地北半の下層には洪水堆積の砂礫が北西から南東の方向に堆積しており、下流の古墳周溝を埋めている。砂礫の上層からは6世紀後半の須恵器杯が出土した。

久我畷東側溝S D 44601 路面から60cm下位で幅約1.0m、深さ約20cmで14mを検出した。西肩が削平を受けており、北東の延長部は後世の削平により失われている。

久我畷西側溝S D 46607 路面から40cm下位で幅約1.0m、深さ30cmを検出した。北東の延長部は後世の削平により失われている。

土坑S K 46608 S D 46607の約0.7m西で並行する幅約1.0mを5m検出した。久我畷西側溝の一部かと考えられる。S K 46608を久我畷西側溝と考えた場合この溝とS D 46601は、内側の肩部で約8mを測る。この数値は、左京第53次調査で検出した第1期(平安京造営時)の路面幅(8.8～8.9m)に近いものである^(注12)。

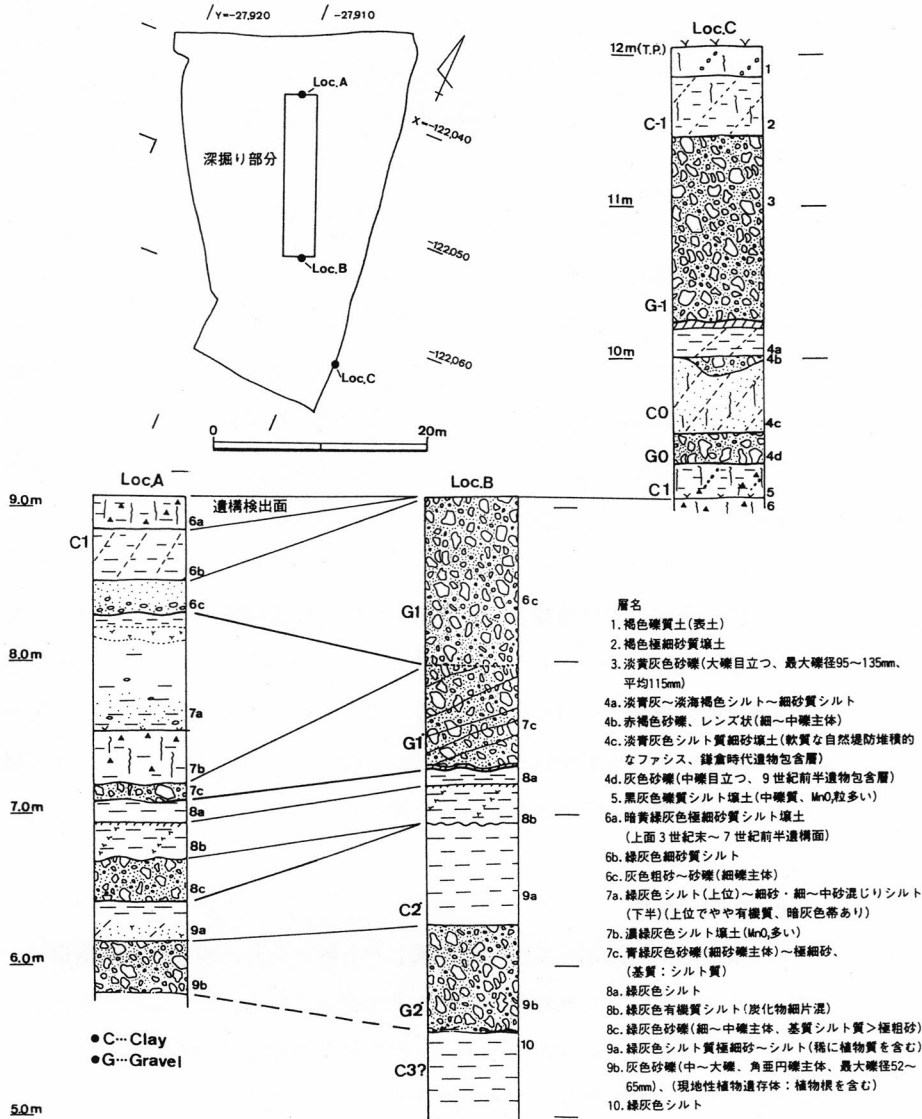
⑩算用田遺跡(1K-16次)調査(第4図)

小泉川と久我畷の交差する南西での調査である。地表下約3m(標高9m)で古墳時代初頭から飛鳥時代にかけての遺構を検出した。その上層では全域に厚さ約1.4mの砂礫の堆

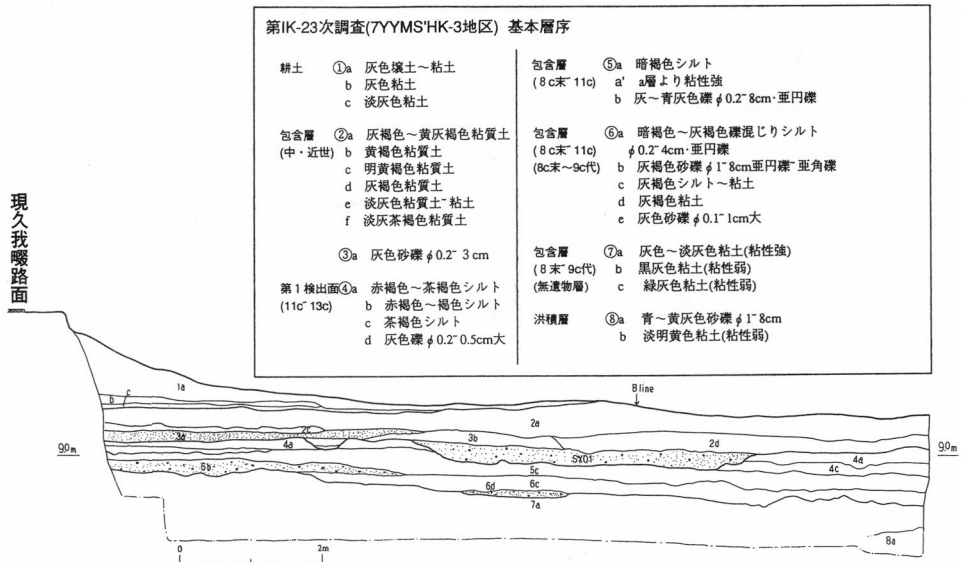
積が認められる。小泉川の氾濫堆積と考えられる。^(注13)

⑪大山崎町遺跡確認調査23次調査(第5図)

久我畷と西国街道の接合地点から久我畷に沿って約50m東の調査である。現地地表下約2.7m(現久我畷から約3.1m)で8世紀末～9世紀にかけての遺物を包含する灰色～淡灰色粘土が緩やかな勾配をもって堆積している標高9m以下の状況が確認された。その上層では8世紀末～11世紀の遺物を包含した砂礫と11世紀～13世紀の遺物を包含した砂礫が間層を挟みながら北西から南東に向かって堆積している。また標高9m以下では、洪水堆積の砂礫がみとめられる。^(注14)



第4図 算用田遺跡土層柱状図(注13による)



第5図 大山崎町遺跡・確認第23次調査断面図(注14による)

⑫長岡京跡左京第364次調査(水垂遺跡)

長岡京の遺構を検出した最も標高の低い地点での調査で、古墳時代から鎌倉時代にかけての水垂遺跡を含む長岡京跡左京六条三坊にあたる^(注15)。京の東南に位置し、六条条間小路の南北両側溝と宅地内で建物跡を検出している。その東や南では、長岡京期の遺構を検出しておらず、東南の京極の様相を呈している。また、調査地内を南流する五間堀川の調査で^(注16)は、この川の成立が10世紀(平安時代)に遡ることが明らかとなった。これらの遺構を検出した標高は9.2m前後と計測されている。

以上でみたように、現在までに確認された長岡京期前後の遺構検出面の標高は、巨椋池の埋め立て直前の水位(標高10m)より1m前後低いことがわかる。このことから、各時代における遺構検出面の標高は、後世の地形条件とは必ずしも一致しないということが明らかである。長岡京期以前の地形条件については、本論の主旨とはずれるので別稿で扱いたい。以下では、平安京期山陽道の地形的条件を検討したい。

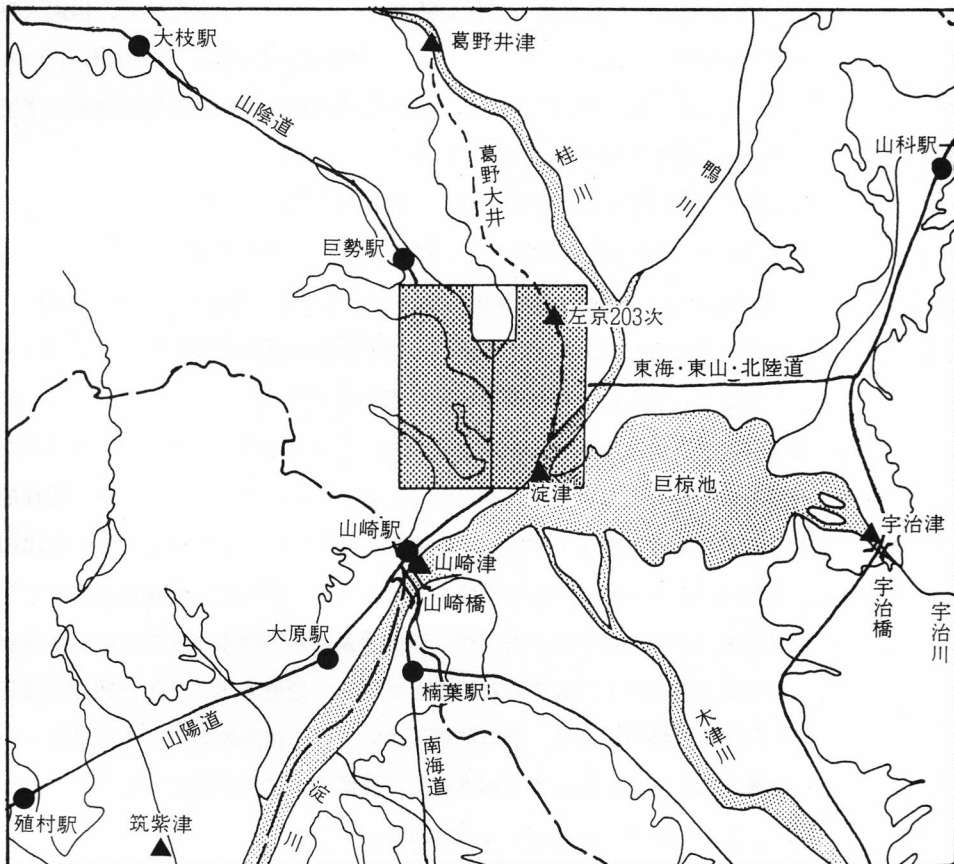
3. 古代山陽道の地形条件

9世紀後半の段階から山陽道としての機能を果たしたと考えられる現在の西国街道は、低位段丘上を占地しながら安定した地形条件のルートを探っている。それに比べ平安京遷都時に築造されたと考えられる久我曝のルートは、西北側が西山山系からの小河川によって形成された扇状地の先端部にあたり、東南側は桂川が並行して流れ、巨椋池の湖岸線の低地になる。

久我暲は、この両者の境界に設定された計画道ということになり、地形条件的には決して恵まれた占地というわけにはいかない。ここ数年に大山崎町内でおこなわれた平安京初期の調査によると、北東部では、6世紀後半の洪水堆積による砂礫の上に道路を築造したことが明かとなり、南西部では、路面の調査がなかったものの、下流への勾配が取れず排水状況の悪い湿地化した8世紀末～9世紀の状況と、11世紀を下限とする砂礫と13世紀を下限とする砂礫が間層を挟みながら北西から南東に向かって堆積している地形的環境が明らかとなった。

このことを要約すると、古墳時代には大量の砂礫を下流に押し流していた小河川の地形が、長岡京期から平安時代にかけて下流への排水条件の悪い沼状の環境となり、その後11世紀以降には時々洪水による砂礫の堆積が繰り返される状況となったといえる。

長岡京の南には、桂川・宇治川・木津川の3川が合流しており、その南東には昭和16年に排水・干拓された巨椋池が1200年前の長岡京期にも水をたたえていたことが窺える。巨椋池の干拓直前の水位は標高10m前後である。かつて長岡京の調査で筆者は、巨椋池の水



第6図 長岡京の陸路と駅および水路と津(注2による)

位であった標高10m以下には京の造営はおこなわれていないと考えていた時期があったが、標高9m以下で同期の遺構が検出されるに及んでこの考えを改めるようになった。

長岡京期の巨椋池の水位や明確な湖岸線は明かではないがこのことは長岡京造営にかかわる大きな研究課題である。以下ではこれらのことを踏まえ何故、平安京遷都時における山陽道が現在にその痕跡を残す、久我暁のラインに路線決定されたか、その意義について考えたい。

4. 山陽道路線決定の意義

久我暁は、「二つの旧都への道および山陽・南海両道の主駅、さらに水陸の交通路の結接点としての山崎駅^(注18)」を始発点として桂川右岸を条里地割りの交点を斜行する直線道路として、平安京の羅城門以南に造営された「鳥羽作り道」にむけて一直線に造営された、と解釈することにより、平安京遷都後の山陽道であるとかんがえられる。平安京と山崎駅を最短距離で結ぶという、現在考えられる最も合理的な路線決定への判断基準である。しかし、「地形的に極めて不安定な沖積底地」に最短距離で結ぶという理由だけで、桓武天皇や、律令官人達がこの路線の決定をおこない、当時の主要官道を築造したのであろうか。地形条件の稿でみたように、長岡京のおかれた、この地の地形条件は、長岡京期から平安時代にかけては下流への排水条件の悪い環境下にある。

水山高幸氏によると「長岡京期頃の山崎の津は、無堤時代に淀川の河岸へ人々が進出した姿」であり、^(注19)そういう土地条件を理解して、桓武天皇は「水陸交通の便利を考えて」（延暦6年）、「水陸に便利な」（延暦7年）長岡の地に都を建てているということになる。

桂川・淀川には堤が設けられておらず、下流への排水条件の悪い環境下にありながらも水陸交通の便利を考えて、水陸に便利な長岡の地に都を建てたという解釈が成り立つ。逆に言えば、一端河川の水が増水すれば、基本水位の高い長岡京の東および南部は水に満たされるという不便を合わせもっていたという理解が必要になる。このような歴史・地理的な地形条件を考えあわせると、桂川・宇治川・木津川の3川の内、最も水量の多い木津川^(注20)は、増水時には大量の砂とともに緩やかに水位を上げながら、長岡京の東南部を浸すことになる。長岡京廢都説の1つに洪水説があるが、西山水系からの洪水より以上に、南東部の水位の上昇による洪水の方が十分考えられることである。延暦6年、7年と続けて遷都の旨を重ねて詔した記録は特異であり、その解釈については、諸説のあるところであるが、^{いますめらみこと}今皇帝の治世に編纂された史書において了解された「長岡の地に都を建てている」遷都の意義については、いささか異議を感じるころである。

平安京遷都後桂川に並行して設けられた山陽道は、長岡京廢都後に条里水田に戻された

桂川右岸の可耕地へ、下流から水が進入することを防ぐ堤の機能を合わせ持つことになるのである。11世紀以降に起こる時々の洪水には極めて脆いこの堤は、長岡京期から平安時代前期にかけての、下流からの河川の増水による水の進入にはきわめて有効であったと考えられる。

治水と耕地の確保は国家の大計であるから、この観点にたった平安京の造営計画の立案は十分考えられることである。

ここに平安京の山陽道の路線をこの場所に決定した意義が見いだせるのである。

最後に、本論に立脚した、長岡京期山陽道の解明が近い将来おこなわれることを展望し、結びとしたい。

(とはら・かずと＝当センター調査第2課調査第4係主任調査員)

注1 戸原和人「長岡京の官道」(中山修一先生喜寿記念事業会『長岡京古文化論叢Ⅱ』1992年)

注2 高橋美久二「長岡京と水陸の便」(中山修一先生喜寿記念事業会『長岡京古文化論叢Ⅱ』1992年)

注3 注1による。

注4 注2による。

注5 林 亨・高橋美久二・李 進枝・川上希恵「山城国府第1次(7YYSRK地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第1集 大山崎町教育委員会) 1980

注6 林 亨・百瀬正恒・百瀬ちどり「長岡京跡右京第69次(7ANSDD地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第4集 大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1984
(『長岡京跡右京第159次(7ANSDD-2)現地説明会資料』 大山崎町教育委員会) 1984
小山雅人・竹井治雄・黒坪一樹・戸原和人「百々遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第42冊-4 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注7 戸原和人・竹井治雄ほか「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第47冊 1992 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

戸原和人・竹井治雄ほか「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第47冊 1992 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注8 秋山浩三「長岡宮第233次(7AN110地区)～北辺官衙(南部)、森本遺跡、岸の下遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第32集 向日市教育委員会) 1991

注9 戸原和人・百瀬ちどり・國下多美樹 他「長岡京跡左京第28次(7ANMTG-1地区)調査概要-左京五条三坊四町・棚次遺跡・久我畷-」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1985

注10 奥村清一郎・戸原和人・百瀬ちどり・中塚良「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要-左京六条二坊五・十二 下八ノ坪遺跡・久我畷-」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第

- 14冊 長岡京市教育委員会 長岡京跡発掘調査研究所) 1985
- 注11 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注12 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注13 中川和哉「算用田遺跡発掘調査概要(IK-16次)」『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注14 「長岡京連絡協議会」N095-09 1995 大山崎町遺跡確認第IK-23次(7YMS'HK-3)当調査は、調査終了後間もないため未報告であるが、論考を進めるうえで重要であるため、調査地の断面図を載せた。資料の使用については大山崎町教育委員会林 亨・古閑正浩両氏にお願いし、快諾を得た。お礼申し上げます。
- 注15 「平安時代条里制遺構」長岡京連絡協議会資料」No.95-12
- 注16 注15による。
- 注17 『巨椋池干拓史』 巨椋池土地改良区 1962。
- 注18 注2による。
- 注19 水山高幸「歴史時代の淀川の河岸について」(中山修一先生喜寿記念事業会『長岡京古文化論叢Ⅱ』 1992年)
- 注20 注19による。
- ※ 長岡京跡左京第28次調査と算用田遺跡(IK-16次)調査の地層の認定については、向日市埋蔵文化財センター中塚 良氏の分析による。中塚氏は、桂川右岸地域の地層成立過程について長年研究しておられ、今後の論攷も氏の分析結果に負うところが多い。当地域における総合的な歴史・考古史料の解明のためにも、今後とも氏の研究成果の発展に期待したい。